中村光夫全集

第十五巻

筑摩書房

中村光夫全集　第十五巻
昭和四十七年五月二十五日発行

著者　中村光夫

発行者　井上達三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(291)七六五一(代表)
振替　東京四一二三

印刷　株式会社精興社
製本　牧製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1393 (製品) 72515 (出版社) 4604

第十五巻目次

人と狼……3
あとがき……105
パリ繁昌記……107
あとがき……204
汽笛一声……207
あとがき……321
家庭の幸福……325

*

鉄兜……357
『わが性の白書』……379

解説……福田恆存 593
解題……599

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

戲

曲

人と狼（四幕）

時――現代、一月なかばから初夏にかけて。

登場人物

久木俊三（会社員、五十歳）
のり子（俊三の妻、四十二歳）
さと子（長女、二十歳）
一郎（長男、十八歳）
山口敏郎（久木の友人、五十歳）
お光（山口の女中、三十歳）
木下青江（事務員、二十九歳）
松井安雄（久木の後輩、四十五歳）
きみ子（安雄の妻、四十歳）
大川博（東京病院勤務の医師、二十八歳）
ダンスの女教師（三十歳）
きよ（久木家の女中、二十歳）
今井・河野（男の社員、二十五歳くらゐ）
西田・川崎（女の社員、二十歳くらゐ）

第一幕

一月の土曜日の午後。
久木家の洋風の広いサロン。
久木の妻のり子、中央の卓子にむかつて手紙を書いてゐる。
いらだつて書きかけを裂く。

のり子　いやだわ、こんな手紙書くの。

きよ　（登場）山口様がおみえになりました。

のり子　お通しして。（さいた手紙を袂にしまひ、身づくろひをする）

山口　（登場、モーニングを着てゐる）奥さん、ちよつとすみませんが、これを。（右手に喪章をぶらさげて、左腕をだす）

のり子　（立上る）どうなすつたの、正月早々。

山口　葬式に行くんです。びつくりなさることはありません。わたしだつて友達ぐらゐゐるし、ゐれば正月でも死にますよ、友達つて奴は。

のり子　（喪章をまきながら）どなた？　おなくなりになつたの。

山口　奥さんのご存じない人間です、われわれの遊び仲間の。

のり子　急に？

山口　ええ。（頭に手をあてて指をひらいてみせ）これですから。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のり子　脳出血？

山口　ええ、酒とマージャンのやりすぎで、ホテルの風呂のなかで、ころつといつちやつたんですから、極楽往生です、当人は。

のり子　はい、いかが、これで。

山口　結構です。ありがたう。……失礼しました。（二人笑ふ）

のり子　びつくりするわ、いきなり喪章なんかおだしになつて。

山口　忘れるといけないと思つたもんで。今朝でがけに喪章がないんでひと騒ぎをやりましたよ。お光の奴、どこかへしまひわすれやがつて。いま御近所で買つてきたんです。……まだお帰りになりませんか？

のり子　ええ。でも土曜日ですから、もうそろそろ。お急ぎ？

山口　いや、お留守の方がかへつていいかも知れない。御病気のこと、はつきりした結果がわかりましたか？

のり子　ええ。そのことで御相談にあがらなきやいけないと思つてゐたとこなんです。（顔をおほひ）いけないんです。今朝病院へききに行つたんですけど。

山口　癌ですか、やつぱり。

のり子　（顔をおほつたまま）ええ。

山口　あんなに元気でも。

のり子　（手を放して）切つたところを検査してみたらはつきり癌なんですつて。だから……

山口　駄目だ、といふんですね。

のり子　ええ。一応元気にはなるけれど、半年ぐらゐで、また。

山口　人間の寿命は医者だつてわからんでせう。――しかし困りましたな。むろんご存じないんですね、本人は。

のり子　ええ。やはり知らせちやいけないんですつて。で、お医者様からぢかに会社へ電話していただきましたの。あの人の顔をみて平気で嘘を云へる自信ありませんもの。ずゐぶんしらじらしいことを云へるのね、お

医者さんて。すつかりだましてくださつたわ。

山口　自分に都合のいいことは簡単に信じますさ、誰だつて。

のり子　わたし顔をみるのが恐くて。きつと喜んでかへつてくるだらうと思ふと。

山口　気持をしつかりお持ちになるんですな、奥さん。なんでもわれわれでお役に立つことなら。

のり子　実はそれでお願ひしたいことがあるんですけど。

山口　どうぞ、なんですか？

のり子　主人を山口さんの会社に入れていただくお話、少し待つていただきたいの。

山口　どうしてです？　独立して自分の会社を持ちたいといふのは、久木君の年来の志ぢやありませんか。かうなればなほさら。

のり子　ええ、でも三月やそこらでは思ふやうな仕事もできないでせうし、のこされる者としましても。

山口　はつきりおつしやいますね、ぢやあ奥さんは、久木君が第一商事の社員として死ぬことをのぞんでをられるといふわけですね。

のり子　まあ！

山口　その方が退職金のほかに弔慰金も這入る。それを山口なんかのボロ会社に出資して、元も子もなくしてしまつちやかなはない……

のり子　そんな！

山口　そんなつて、つまりさうでせう。僕は話をはつきりさせるのが好きなんです。奥さんはいつも僕を肚の底で煙たがつていらつしやる。

のり子　まあ、どうして？　主人のたつたひとりの古いお友達ですもの。いつも……

山口　亭主の親友なんて、大体奥さんがたには有難くない存在ですから。ことに金をださせようなんてのは。

のり子　そんな厭味をおつしやるもんぢや……

山口　ありません、か？　あはは、いや、真面目に云つて奥さんがさうお考へになるのも、もつともだと思ひます。しかし久木君の気持も男として察するんです。ニューヨーク時代の久木君の勢ひを思へば、このまま終らせたくないですからね。まつたくあのころは五井商事の若手としてどこまでのびるか本社でも噂の種だつた……

のり子　戦前の夢をおふのは危険ですわ、この歳で。

山口　交換船でかへつてくると、戦争中はずつと冷飯の食はされどほし、おまけに財閥解体のときも松井一派にうまく立廻られて、まだ重役にもなれず。

のり子　ひどいことをおつしやるのね。松井さんは立派な紳士で、私共も親しくおつきあひねがつてますわ。主人の地位だつて……

山口　立派にはちがひありません、それは。でも、むかしはもつと期待なさつたでせう。うちの主人はひとに追ひ越されてばかりゐるつて、奥さんもいつかおつしやつたぢやないですか。

のり子　ものおぼえがいいのね、山口さんは。

山口　ここで肚をうちわつた話をしませう。

奥さん、久木君の退職金がいくらあります？　かりに五百万として一割にまはせたとしても年に五十万、月にして四万いくら、とても税金を払つてこの家には住めませんよ。

のり子　そんなこと今から考へてやしませんわ。

山口　お考へになるべきですね、冷静に。思ひきつて僕の計画を申し上げると、久木君に万一のことがあつたら、奥さんに社長になつていただきたいんです。

のり子　御冗談を。

山口　いや、本気です。さつきのお話をきくまへから考へてゐたんです。いまうちの会社で一番大切なのは、お役所や外国商社との交渉でせう。それには久木君より奥さんの方が適任ですよ。ニューヨークの日本人社会

の女王と云はれた方ですもの。

のり子　いやですわ。

山口　英語だつて自由自在だし、取引の話はお上手だし、何しろ木島嘉平の血をひいてらつしやる、毛並がものを云ひますよ。

のり子　それこそ昔の夢ですわ。父が死んでからもう十五年、今では名前を覚えてゐる人もゐませんわ。

山口　久木君をこれまでにしたのは奥さんの力ですからね、親の光でなく。

のり子　そんなにわたし、でしやばりにみえて？

山口　それがみえないから大したものです。

のり子　いやね、山口さん口がお上手で。

下手の扉あいて、一郎登場。美術大学の制服を着、しなしなした身のこなし

一郎　ただいま。（山口に）いらつしやい。

のり子　おかへり、おひるは？

一郎　まだ、ママ。

のり子　仕度できてるから先におあがり。ママ、ちよつと御用だから。

一郎　はい。（退場しかけて）ママ！

のり子　え？

一郎　あの、あした旅行に行くの、一晩どまりで。

のり子　学校は？

一郎　月曜日お休みなの。

のり子　誰かと一緒？

一郎　（しなをつくつて）あの、大橋さん、三年の。

山口　（故意に愛想よく）いいな、何処へいらつしやるの？　坊つちやん。

一郎　ええ……まだよくきめてないわ。

のり子　それで旅費？

一郎　いいのよ、ママ。

のり子　え？

一郎　いらないの。

のり子　どうして？

一郎　あの、大橋さんと二人でアルバイトしてつみたてたの。

のり子　へえ、ぢやあ、パパがお帰りになつたら、うかがつてみてね。

一郎　パパにはもう話したわ。電車で一緒だつたの。いま煙草屋へよつて、すぐお帰りになるわ。なんだかとても御機嫌よ。旅行もすぐＯＫだつたわ。

のり子　（山口と顔を見合はせ）さう、それぢやいいわ。

一郎退場

のり子　（ひとりごとのやうに）煙草は止めてたのに。

山口　うまいでせうな、久しぶりで吸ふ味は。しかしいいパパだな、こんな嬉しい日にまつすぐかへるなんて。僕だつたら二三日のみ続けますね。

久木登場

山口　やあ、おかいんなさい。おめでたう、奥さんにききましたよ。

のり子　おかへりなさい。

久木　（首に繃帯をまいてゐる）うん。（山口に）やあ、ありがたう。やはり重荷がとれた感じだね。（のり子の方をむき）煙草もかうして公然とのめるし……

のり子　まあ、それぢやあ……

久木　おもてぢやときどきすつたよ、白状すると。

山口　それで治りや吸ひどくだね。

久木　やつぱりなんとなくうまい、不思議だね。

山口　ちつともやつれてないな。白髪もふえないし、色男はちがふな。

のり子　あんまり吸はない方がいいわ。

久木　少しは大目に見てくれよ。せつかく治つたんだから。

のり子　そりや、さうだけど。

久木　変な目付をするのは止めてくれ、もう病人ぢやないんだ。

のり子　そりや、さうだけど。

山口　（笑つて）えらい元気になつたね、現金に。君着かへてこない。

久木　いや、いいんだ。どつかへまはるの？　これから。

山口　うん、ちよつと……まあ、今日は御見舞にきたんだけれど、幸ひ好結果だつたし、話をすすめてもいいだらう。別に心境にかはりないかい、近頃。

久木　心境か、ますます積極的だよ。

山口　さうか、僕の方ぢや君が入院してから、一応話はそのままにしてあるんだが。

久木　入院してかへつてはつきりしたね、気持が。

山口　それなら僕の方もいつでも社長の椅子をあけわたすよ。

のり子　山口さん。

山口　（久木に）そこで問題は……

久木　出資額だらう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com